

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第十一章）

前の果ては顕かであるかと問うた時、  
偉大なる成就者は、「そうではない。」と説かれた。  
輪廻は始まりと果てが無く、  
それに前は無く、後は無い。 1

始まりと果てが無いものに、  
それに、中間が何処に有ろうか。  
それ故に、それに前後か、  
一緒である順序は不合理である。 2

もし、生が前となり、  
老死が後であるならば、  
生には老死が無く、  
死んでおらずとも生まれることになる。 3

もし、生が後となり、  
老死が前であるならば、  
生の無い老死は、  
無因であると、如何様になろうか。 4

生と老死は、  
一緒であるとは適わない。  
生じつつあるものが死ぬこととなり、  
双方とも無因を持つものになるだろう。 5

それに、前後と一緒という  
それらの順序があり得ない、  
その生とその老死を、  
何故に概念化するのか。 6

輪廻のみに、前の果てが  
有るのではないだけでなく、  
因果そのものや、  
性相と事相そのものや、 7

感受作用と感受者そのものや、  
意味のある何ものでもよいが、  
まさしく一切の諸事物においても、  
前の果ては有るのではない。 8

前の果ては顕かであるかと問うた時、  
偉大なる成就者は、「そうではない。」と説  
かれた。輪廻は始まりと終わりが無く、  
それに前は無く、後は無い。(仏)

始まりと終わりが無いもの。  
それに、中間が何処に有ろうか。  
それ故に、それに前後か、  
一緒である順序は不合理である。(仏)(顕)

因果そのものや、  
性相と事相そのものや、  
感受作用と感受者そのものや、  
意味のある何ものでもよいが、(仏)

輪廻のみに、前の果てが  
有るのではないだけでなく、  
まさしく一切の諸事物においても、  
前の果ては有るのではない。(仏)

「前と後の果てを考察する」という第十一章である。

(第十二章)

或る者は、「苦しみは、自らが為した」  
「他者が為した」「双方が為した」  
「無因より起こる」と主張する。  
それは、為されるに適さない。 1

もし、我が為したとなれば、  
それ故に、依拠して起こるとはならない。  
何故ならば、これらの蘊に  
依拠してこれらの蘊は起こる。 2

もし、これよりそれは他であり、  
もし、これよりこれが他であるならば、  
苦しみは、他が為したとなり、  
それらの他が、それを為したとなる。 3

もし、プトガラ自らが、  
苦しみを為したならば、我であるものが  
苦しみを為したプトガラは、  
苦しみ以外の何ものであろうか。 4

もし、他のプトガラより  
苦しみが起こるならば、  
その苦しみを為して与えた他者が、  
苦しみ以外に、如何様に適おうか。 5

もし、他のプトガラより苦しみが  
起これば、それを為して  
他者に与える他のプトガラは、  
苦しみ以外の何ものであろうか。 6

我が為したと成立していないので、  
苦しみを、他者が何処で為したのか。  
他者が苦しみを為すとは、  
それは、その我が為したとなる。 7

先ず、苦しみは我が為したのではない。  
それ自体が、それを為していない。  
もし、他の我が為していないならば、  
苦しみは他者が為したと、何処でなろうか。 8

もし、それよりこれは他であり、  
もし、これよりそれが他であるならば、  
それらの他がこれを為したので、  
苦しみは他が為したとなる。(仏)

もし、プトガラ自らが、  
苦しみを為したならば、我であるものが  
苦しみを為したプトガラは、  
それら苦しみの無いものである。(仏)

もし、他のプトガラより  
苦しみが起こるならば、  
その苦しみを為して与える他者は、  
苦しみが無いと、如何様に適おうか。(仏)

※本偈は『ブッダパーリタ』には無い。

もし、各々が為したとなれば、  
苦しみは双方が為したとなる。  
我が為さず、他が為さなければ、  
苦しみが無因であると、何処でなろうか。

苦しみのみが、四様相として  
有るのではないのではないけれど、  
外界の諸事物においても、  
四様相は有るのではない。 10

もし、各々が為したとなれば、  
苦しみは双方が為したとなる。  
他が為さず、我が為さなければ、  
苦しみが無因であると、何処でなろうか。(仏) 9

苦しみのみが、四様相として  
有るのではないのではないけれど、  
一切の諸事物においても、  
四様相は有るのではない。(顛)

「我が為した・他が為したを考察する」という第十二章である。

※ (仏) は、『根本中論』チョコロ訳 (『ブッダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述。

(顛) は、パツァブ訳 (新訳) ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顛句論』で引用された偈を示す。